

---

# 臆病なボクと氷のような貴方

蒼氷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

臆病なボクと氷のような貴方

### 【Nコード】

N4166L

### 【作者名】

蒼氷

### 【あらすじ】

一人のロケット団員と一匹の臆病なガーディのお話し。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。到らない点が多々あると思いますがよろしく願います。

## プロローグ

ここはどこだろう？

ボクはどこに行くんだろう？

怖い、怖いよ……。

誰か

誰か

ボクを助けて

ある晴れた気持ちのいい日だった。ボクはお気に入りの木陰でんびりと過ごしていた。いつもと変わらない静かで穏やかな時をボクは堪能していた。

そんなとき、ボクの耳に不意にたくさんの足音が届いた。それに混じってポケモンたちの微かな声も聞こえる。ボクは不思議に思っ  
てそれらが聞こえた方角に首を向ける。すると微かだが遠くの方がほんの少し薄茶色に霞んでいた。しかもそれは物凄い早さでこちらに向かつて来ている。

瞬間、ボクは嫌な予感がした。あれに飲み込まれてはいけないと

頭が訴え始めた。ボクは立ち上がるとそれとは反対側の方へと逃げ出した。

ボクは全力で走ったけど結果を言えばあの薄茶色の霧に飲み込まれてしまった。それくらいあれの進行速度は早かった。薄茶色の霧の原因はたくさんポケモンたちが走って出来た砂埃だった。皆が皆、必死の形相でナニかから逃げている。ボクは自分の横に来た一匹のデルビルに話しかけてみた。

「こんにちは！突然で悪いんだけど皆何から逃げているの!？」

すると隣にいたデルビルはボクにチラッと横目を流してボクの質問に答えてくれた。

「ロケット団さ!!!」

ロケット団 それはボクたち野生のポケモンにとって最大の恐怖の対象だ。聞いた話しによればロケット団に捕まったポケモンは酷い仕打ちを受け、最悪死んでしまうポケモンもいるらしい。

「どうしてロケット団がここにいるの!？」

「そんなの知るか！どうせ俺たちを捕まえに来たんだろ！俺の仲間も捕まった。他の奴らもだ。捕まったら最後、死ぬような仕打ちに合う。お前も捕まらないように頑張って逃げ切れよ！！」

そういつとデルビルはスピードを上げて他のポケモンたちに混ざり、見えなくなってしまった。ボクも彼に習ってスピードを上げようとしたその時だった。

「ッ！？」

突然後ろから誰かに追突され、バランスを崩したボクはそのまま転んでしまった。転んだボクを避けるようにして他のポケモンたちが横から過ぎ去っていく。ボクは慌てて体勢を立て直し、走り出そうとしたがそれは出来なかった。

転んだボクを避けるように他のポケモンたちが道を逸れたのでボクの後ろがほんの少し空いた。その僅かな隙をロケット団は見逃さなかった。走り出そうとするボクにロケット団の誰かがモンスターボールを投げて来た。逃げ出すことに夢中だったボクはそれに気付くはずもなく、あっさりとそれに当たり、捕まってしまった。

捕まったことに気付いたボクは途端に恐怖に陥った。身体は自然と震え、頭の中は真っ白になってゆく。

勇敢なポケモンだったら抵抗して逃げ出そうと試みるけれど臆病なボクはそれが出来なかった。出来たことといえばモンスターボールの中でただただ脅えることだけだった。

ここはどこだろう？

ボクはどこに行くんだろう？

怖い、怖いよ……。

誰か

誰か

ボクを助けて

## 出会い

ボクがボールの外に出れたのは捕まって暫くしてからだった。外に出たボクが最初に見たのは薄暗い、広い部屋だった。そこには白い服を来た人間が数人いて、皆がボクに冷たい視線を向けていた。まるで道具を見るような、そんな目だった。

「ガーディカ」

「性格は臆病だ」

「使えないな」

「だが進化させれば」

その人たちは口々に小声で何かを言っている。ボクはビクビクしながらその声を聞いていた。ボクは本当にどうなってしまっただろう？

「イオリに育てさせては？」

「奴は腕がいいからな」

「駄目だったらそれまでだ」

「そうしよう」

この人たちの短い話し合いの結果ボクは“イオリ”と呼ばれる人間に引き取られることになったらしい。ボクの品定が終わったのか、白い服を来た人間の一人が「コイツをイオリに渡しておけ」という声が出た。すると近くにいた同じ服の人が短く返事をする。「こいとボクに命令した。ボクはその人の後ろを素直について行った。

後でわかったことだけどボクが最初にいた場所は“研究室”という所でボクを冷たい目で見ていたのは“研究員”という人間たちだった。

次にボクがやって来た場所はさっきいた所より明るい、少し狭い部屋だった。その中には一人の人間しかいなかった。その人は白い服を着た人とは対照的の黒い服を着ていた。ボクと白い服を着た人はその人の手前まで近づく。そこまで来ると白い服を着た人が黒い服を着た人に何かを喋り始めた。

「　　というわけだ。イオリ」

聞こえたその名前にボクは耳をピンとさせた。白い服を着た人は確かにこの黒い服の人のことを“イオリ”と呼んだ。ということはこの人がボクのご主人となる人間なのだろうか？イオリと呼ばれた黒い服の人は無言で白い服の人に頷いた。それを確認した白い服の

人はボクに視線を向けることなく部屋から出て行ってしまった。

部屋に残されたボクは目と鼻の先にいるイオリを恐々と見上げた。イオリは銀色の短い髪と切長の蒼い瞳という特徴的な外見を持つ若い男の人だった。その特徴的な蒼い瞳が不意にボクを捉えた。

その瞬間、ボクの身体が大きく震え始めた。そして今まで生きて来た中で一番と言つていいほどの、圧倒的な恐怖と威圧感がボクを襲った。

それはまるで氷のように冷たい目だった。こんな目で見られたらどんなポケモンだってこう思う筈だ。

“絶対この人に逆らつてはいけない”と。

ボクは逃げたかった。だけどボクの足は完全にすくんでしまい、それは出来ない。せめて視線から逃れようとしたけど駄目だった。ボクの首は石みたいに動かなかった。そんなボクをよそにイオリは視線を反らすことなくこちらをじっと凝視していた。だけど暫くすると最初と同じように不意に視線が外された。するとボクを取り巻いていた二つの重苦しいものが嘘のように消えていった。ボクは無意識の内に安堵の溜め息を吐いた。

それからイオリが何かを言うわけでもなく、ボクはイオリが持っていたモンスターボールの中に戻された。その間イオリと視線を合わせないよう、ボクはずっと下を向いていた。

これがボクとイオリの初めての出会いだった。



## 再開

あの出会い以来、ボクが外に出ることはなかった。モンスターポールの中は少し狭いけど居心地は悪くなかった。それに、そこから出れば怖いイオリと会うことになるから正直、ボクは外に出たくなかった。だけとある日、ボクは外に出ることになった。

ボクが久しぶりに外へ出たとき、ボクの目の前にはむき出しの、殺風景な地面が広がっていた。そしてそのすぐ前に、黒い服を着た見慣れない一人の人間と、一匹のヘルガーがボクと少し間隔を空けて立っていた。ボクはその姿を見るや否や、早くも身体が震え始めた。だけど驚いたことに、そのヘルガーがボクに向かって話しかけて来た。

「久しぶりだな」

ボクは彼が言った言葉に首を傾げた。同時に身体の震えも収まった。どうやらボクたちは面識があるらしいのだが、ボクには全く心当たりがなかった。

「覚えてないのか？あの時お前が話しかけたデルビルだ」

ボクはその言葉で思い出した。ボクに頑張つて逃げ切れと言いつた彼だ。まさかこんな所で再開するなんて夢にも思わなかった。

「捕まっただんだな、お前も」

その言葉にボクはただ「うん」と答えることしか出来なかった。彼は続けてこう話した。

「俺も逃げてる最中に捕まった。最初は逃げ出してやると考えていたが、今の主人が中々に優秀な人間だね。俺を強くして進化させてくれた。それ以来、逃げようとは思わなくなった」

ボクは彼の主人らしい後ろの人間に視線を向けた。やはり怖い雰囲気を感じさせているが、イオリほどではなかった。ボクは視線を彼に戻した。

「お前の主人はどんな人間だ？」

「凄く、怖い人だよ」

ボクが素直に答えると彼は視線を後ろに向け、すぐにそれを戻した。

「確かにな。このバトルで負けたら、お前悲惨な目に合うかもな」

「バトル？」

ボクはその言葉に再び首を傾げた。バトルは一体なんのことだろう？すると彼は変な顔をした。

「お前、何も知らないのか？」

彼の言葉に無言で頷く。すると彼は残念そうな表情を浮かべた。

「…そうか。それなら教えてやる。これから俺たちは戦うんだ」

「何故？」

「簡単な話し、どちらが強いか決める。ただそれだけだ。勝てばいいが負けたら悲惨なものだ。負けたポケモンは大抵、その場で主人に殴られる。無論、主人の気が済むまでな。疲れているのもお構いなしにだ」

彼の言葉にボクはぞっとした。そんな目に合わされるなんて考えたくもない。ましてやボクの場合、その主人がイオリとなるので、直のこと考えたくなかった。

「この人間は気が荒いからな。そうなりたくないなら、強くならなくちゃいけない。強くなればバトルに勝てる。そうすれば酷い目には合わなくなる」

彼はここで言葉を区切った。そしてボクの目を真っ直ぐに見据えた。

「俺も主人に殴られるのはゴメンだからな。ここでお前に勝たなくてはならない」

そういうと彼は先ほどの雰囲気を払拭し、戦闘体勢のそれに変えた。その瞬間、ボクの身体が再び震えた。目の前の彼は先ほどの“彼”ではなかった。

「悪く思っつな」

彼のその言葉が酷く遠いもののように感じた。

## 優しさ

結果から言ってしまうえば、ボクは負けてしまった。それはもう完膚なきまでに。ボクはこのバトルで、自分がどれほど弱いのが痛いほどわかった。バトルは五分と待たずに彼の圧倒的勝利で幕を閉じた。

バトルが終わった後、イオリがボロボロになったボクの元までやって来た。ボクは急に彼の言葉を思い出した。

「負けたポケモンはその場で主人の気が済むまで殴られる」

その言葉が頭を流れた瞬間、ボクは血の気が一気に引いた。ボクの身体は自然、後ろに下がり、イオリと距離を取ろうとした。だけど身体のおちこちが痛くて思うようには進めなかった。イオリはすぐにボクとの距離を詰めてしまった。

「……」

無言のままボクを見下ろす蒼い瞳に、ただただ恐怖しか感じなかった。これからぶたれると思うとそれが更に怖く映る。ボクはいつでもそうされていいように、目を固く瞑った。

スツと自分の両足が宙に浮くのを感じた。それでボクはイオリに持ち上げられたのだと悟った。そしてそのまま地面に叩きつけられるのだろつと予想し、身体を固くした。だけどボクのその予想はすぐに外れたのだと知る。何故ならイオリは素早く、慎重にボクを抱き抱えたからだ。それを感じたボクはスツと目を開き、恐々と視線

を上に乗せた。イオリは視線を真っ直ぐ前に向けて歩いていった。ボクはイオリに抱かれたまま、バトルが行われた場所から去って行った。

人通りの少ない廊下を通り抜け、イオリが向かった所は、小綺麗な部屋だった。人間の暮らしがわからないボクでもここがイオリの住んでる所だとすぐにわかった。部屋は狭くもなく広くもなかった。そこにある物も、生活出来るのに必要最低限の物しかなかった。

イオリはボクを床の上にそと下ろすと、ボクから離れた。そして棚の方へ行くと、そこから何個かものを取り出した。その姿をボクは脅えた目で見ていた。必要なものを取り出したのか、イオリは棚から離れて、またボクの元へとやって来た。そしてボクの頭へ腕を伸ばして来た。

「！」

やって来たのは痛みではなかった。クシャクシャとボクの頭を撫でる心地よい感触だった。ボクは呆然とするしかなかった。まさかイオリに頭を撫でられるとは想像もしていなかったからだ。

イオリはひとしきりボクを撫でた後、先ほど棚から取り出したものの一つをボクの目の前に向けて来た。ボクは少し後退さった。

「安心しろ。これはお前を傷つけるものじゃない」

静かな、落ち着いた声がボクの耳に響いた。それは初めて聞いたイオリの声だった。ボクはまたもや呆然とした。

「臆病だと研究員から聞いていたが、傷薬も怖がるとはな……」

呆れたような声でイオリは呟いた。どうやらイオリがボクに向けて来たものは“キズグスリ”というものらしい。正体がわかったので、ボクは後退さを止めた。

イオリはもう一度、ボクの頭を撫でると、傷薬を怪我している部分に向けた。

シュツという聞きなれない音と共にボクの身体に軽い痛みが走る。だけど、我慢出来ないほどの痛みじゃないので、ボクはじっとしていた。イオリは手際よくボクの治療を行なってくれた。そしてイオリの治療が終わる頃には、ボクの体力はすっかり回復していた。

イオリが治療の道具を片付けている最中、ボクはある一つのことを考えていた。

“イオリは一体どういう人間なのか？”

初めて出会った時は、冷たい眼差しでボクを見下ろしていたのに、怪我をしたボクを丁寧に抱き上げてくれたり、頭を撫でたりと、印象とは真逆の行動をするイオリに、ボクの中のイオリに対する恐怖は少しだけ薄れた。だけど完全ではない。きっとそれが完全に消え去ったときに初めて、イオリという人間を知ることになるだろうと、ボクは悟った。イオリの手によってモンスターボールに戻された後

も、ずっとこのことを考え続けていた。

## 任務（前書き）

一月近く更新を停滞して申し訳ありませんでした。

少々スランプが続いて、ようやく書き上げることが出来ました。このようなことが度々あるかもしれませんが、気長にお待ちいただけると幸いです。

## 任務

翌日、モンスタールボールの外に出されたボクはイオリに連れられて、とある部屋にいた。そこにはイオリと同じ黒い服を着た人間が五、六人ほどいて、ボクたちが部屋に入った途端、一斉に視線を向けて来た。どれもこれもが凶悪な光を孕んでいて、友好的なものは皆無だった。だけどそれは一瞬のことで、誰ともなく次々と視線を外して行った。

「これで全員か？」

室内に声が響く。すると辺りにいた人間たちは皆、その声の方に身体を向けた。勿論イオリも。ボクはその時、この声の主がこの集団のリーダー格の人間だと感じた。その人は視線を八方に巡らせた後、口を開いた。

「これから今日の任務について説明する」

リーダー格の人間がそう言って説明を始めた。その説明を簡略に言うところだ。

各々トレーナーに扮して通りすがりの人間とバトルして、負けた相手のポケモンを奪い取る。

「一人最低でも五匹は連れてこい」

これはリーダー格の人間からの命令だった。グループ内で盗ったポケモンの数が多ければ多いほど、その分与えられる報酬も多いのだそうだ。

「制限時間は日没まで。説明はこれで以上だ」

説明が終わると、皆足早に部屋から出ていった。イオリとボクは一番最後に部屋から退出した。

一旦部屋に戻ったイオリは、着替えを済まして出掛ける準備を整えていた。イオリはあの黒い服から一転して、カジュアルなものになっていた。手には鍔の広い帽子を持っている。

「そういえばこれがお前の初任務だな」

帽子を目深に被りながら、イオリは思い出したようにそう呟いた。そしてボクの前に来てしゃがむと、頭を撫でてくれた。

「だが、任務に入る前にお前を少し鍛えないとな」

それからだ、と一人ごとのように呟いたイオリは、ボクの頭を撫でるのを止めた。

「ガーディ」

そして突然、イオリは氷のような声でボクの名前を呼んだ。その瞬間、イオリと初めて出会った時に感じたあの言葉が急に浮上してきた。帽子が邪魔して表情は見えないけど、きつと声と同じ目をしているに違いない。そう思うと身体が少し震え始めた。

「行くぞ」

その一言がとてつもなく重いもののように感じた。イオリはそれをボクに言うのと立ち上がり、部屋から出て行こうとした。その背中を追いかけるため、ボクは震える身体を叱咤しながら後を追いかけた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4166/>

---

臆病なボクと氷のような貴方

2010年10月16日13時58分発行